

女性の国際移動に関する社会心理学的研究-日系ブラジル人の社会的アイデンティティ-

著者	ヤマモト ルシア エミコ
号	132
発行年	2001
URL	http://hdl.handle.net/10097/14644

ヤマモト ルシア エミコ

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第132号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 人間科学専攻
学位論文題目	女性の国際移動に関する社会心理学的研究 ——日系ブラジル人の社会的アイデンティティ——
論文審査委員	(主査) 教授 大橋 英寿 教授 畑 山 俊 輝 教授 仁 平 義 明 教授 大 淵 憲 一 教授 行 場 次 朗 教授 鈴 木 淳 子

論文内容の要旨

本論文はブラジルから日本に出稼ぎにきた日系ブラジル人17家族を調査し、とくに家族内の女性に焦点をあてて、彼女たちの経済的自立、家庭内役割の変化、生活ストラテジー、ブラジルと日本とのギャップについて、社会的アイデンティティ・モデルを援用して考察したものである。本論文は以下に要約する七つの章からなる。

第一章 課題と背景

第一章では、研究テーマの現状と先行研究を概観し、さらに本研究の四つの課題を提示した。

1980年代後半、ブラジルは不況に悩まされて社会・経済状況が悪化した。失業者が増加する一方、賃金の購買力が低下した。これらの経済状況を背景として、外国を目指してブラジルを出国してしまう人々が目立つようになった。アメリカ合衆国、ヨーロッパ、日本、隣国のパラグアイ、アルゼンチン、その他の国に多くのブラジル人が移動した。

ブラジル外務省の推計データによると、1996年現在、ブラジルの総人口の0.85%が外国で暮らす(Veja, 1996)。アメリカ合衆国で生活するブラジル人が最も多く、次いで南米諸国、日本、ヨーロッパの順になっている。

日系ブラジル人の日本への出稼ぎが飛躍的に増加したのは1990年で、日本政府が「出入国管

理及び難民認定法」を改正してからである。出入国管理統計によると、2000年現在、25万4394人のブラジル人が日本で暮らす。日本在留外国人登録者の上位を調べると、韓国・朝鮮人が1位で外国人総数人口の37.7%を占める。次いで中国人が19.9%で、ブラジル人は15.1%で3位となっている。在留外国人の登録者数を男女別でみると、平成6年から現在まで連続して、総数で女性が男性を上回っている。2000年には、外国人総人口の52.6%は女性で、男性は47.3%であった。外国人女性人口を出身地域別についてみると、アジアから来日した女性が78.3%で高い割合を占めている。韓国・朝鮮人では女性は52.4%に達している。中国人では56.1%、フィリピン人では85.0%が女性である。ブラジル人の場合、男性は55.2%に対して女性は44.8%で、1990年から2000年の間のデータを調べると女性は増加傾向にある。

日系ブラジル人女性は男性と同様に1990年の「出入国管理及び難民認定法」の改正から職種に制限なく日本で就労できるようになった。日本在留外国人女性の就労比率をアジア諸国（韓国・朝鮮、中国、フィリピン）とブラジルを比較した場合、ブラジル人女性人口の就業者比率が最も高い。1990年から2001年の在留外国人統計によると、日系ブラジル人女性の半数以上は技能工・生産工程に従事している。次いで多いのがサービス産業で、その内容はゴルフ場のキャディー、付添い婦、家政婦などである。

Castles（1995）は、世界各地の人口移動の比較研究から4つの共通傾向が存在することを明らかにした。その一つは国際移動の女性化である。かつては労働移民と難民の多くは男性であった。女性は家族呼び寄せの範囲内に含まれていたが、1960年代から女性は労働者として移動に関わるようになってきた。例えば、トルコでは女性が男性より先にドイツに移住したという現象があった。

さらにCastles（1993）は、女性と男性の移住体験が異なることを指摘している。女性移住者は、エスニシティ、ジェンダーに基づいて分けられる労働市場の最底辺に属する。彼女等は低賃金の労働力を同国出身者に提供し、移民が移動先で起業した中小企業の生き延びを可能にする役割を果たすこともある。その例として被服産業があるが、この産業分野ではエスニシティとジェンダーに基づいた複雑な分業パターンが進行していく傾向があるとCastlesは述べている。

一方、比較教育の研究にたずさわるCampani（1995）は、移民女性は労働力として労働市場の周辺に属するのではなく、社会の新しい需要に応じて正規の労働市場に属していると指摘している。つまり、女性労働市場の職種（例えば家政婦、付添い婦、エンター・テイナーなど）は労働市場の周辺に位置する職業ではないとしている。そして移住女性はキャリアに結びつかない職についても、移動により独力で生活することを習得する（Buchanan, 1979; Zlotnik, 1995; Campani, 1995）。移動は女性に自立をもたらし、新たな男女関係を生み出している（Morokvasic, 1984; Tienda & Booth, 1991; Campani, 1995; 伊藤, 1998）。

これらの研究と異なって、インドネシア人女性移住者を研究したHugo（1995）は、既婚女性が家族を残して移動した場合、残された夫は家庭内の仕事（家事、育児など）に携ると報告している。しかし、女性が帰国すると、従来の家族環境に戻り、伝統的な役割分担に復帰する。

山中（1999）は、日系ブラジル人女性に関する研究で、女性移住者は日本で出稼ぎを経験した後、ブラジルへ帰国すると自立心が高まったと感じていることを報告している。この結果は、女性未婚者、既婚者に共通していた。山中がいう自立心を具体的に言えば、日系人女性が自分の意志を積極的に表現するようになることである。

本研究では、先行研究を踏まえて、女性移住者の自立や生活ストラテジーがもつ意味とその

機能、さらに異国生活による変容過程を検討する。具体的には以下の4つの課題である。

第一の課題は、女性移住者の自立の問題である。自立とは、「意思決定における自己決定権と、遂行における自己管理能力のこと」（社会学事典, 1988）である。さらに自立には3つの要素がある。それは経済的自立、生活自立、精神的自立である。本研究では経済的自立と生活自立の面から検討する。

第二の課題は、経済的自立と女性移住者の役割や社会意識との関連を検討することである。具体的には、日本で職種に制限なく就労できる日系ブラジル人女性が経済的に自立した場合、家庭内での役割に変化がみられるのか、さらにこれらの経済的自立が女性の社会意識の再編と関連するのかを検討する。

第三の課題は、出稼ぎ家族の生活ストラテジーを分析して、女性がそのストラテジーとどのように関わっているのかを検討することである。女性は家族を経済的に支えるために、あるいは家族が社会的上昇を果すために国際移動に参加すると報告されているからである。

第四の課題は、出身国で高い教育水準と技能を持つ日系ブラジル人女性が日本でそれらを必要としない職業に就いた時、このギャップを彼女らがどのように意味づけて処理していくのかを検討することである。

第二章 理論的枠組

第二章では、上記の四つの課題を分析する際の理論枠組みである社会的アイデンティティについて説明した。本研究では社会的アイデンティティを「集団やカテゴリーの成員（国家・性・人種・民族・スポーツ団体のような集団やカテゴリー、さらに一時的な集団やカテゴリー）から派生する自己記述である」（Hogg & Abrams, 1988）と定義する。ここで、カテゴリーは社会的カテゴリーを示し、各カテゴリーは相互に対する勢力・地位・威信を備えている。社会的カテゴリーは個人に先行して社会構造を構成している。つまり、社会はこれらの社会的カテゴリー（民族・性・宗教・階級・職業など）から成り立っている。これらのカテゴリーは単独では存在しない。カテゴリーは相互の対比でのみ意味を持つ。例えば、「黒人」という社会的カテゴリーについて考えると、黒人とそうではない人、つまり対となるカテゴリーとの区別によってのみカテゴリーは意味をもつことができる。さらに、こうした社会構造の中に生れた個人は、生まれた場所、皮膚の色、家柄などのカテゴリーにより分類される。個人はイデオロギーを内部化し、肯定的あるいは否定的な自己知覚を媒介にして、特定の社会的アイデンティティを獲得し、そこに同一化していく。

この社会的アイデンティティ・モデルを用いる理由は、女性移住者が日本で敬遠される職種に就くことと、本国でもっていた社会的地位との関連を検討することが可能になるからである。つまり本国で持っていた社会的アイデンティティと、来日してからの社会的アイデンティティとの関連性である。

第三章 研究方法とフィールド

第三章では研究方法とフィールドについて記述した。方法としては、生活史を中心とする面接調査を行った。生活史法とは「個人のパースペクティブ、すなわち価値観、状況規定、社会過程の知識、体験をとおして獲得したルールなどにアクセスする方法」（中野, 1995）である。国境を超えて異国で生活することは何を意味するのかを、この生活史により把握した。そして

日系ブラジル人が語る人生を記述・分析・解釈・編集する作業を通して、彼らが出稼ぎ現象をどうみているのか、さらには社会的アイデンティティを理解することができる。

これまで国際移動を説明するのにプッシュ・プルモデルが利用されてきたが、現在の国際移動を理解するにはこのモデルでは不十分で、移動現象を移住者のライフ・サイクルの一部として把握する視点の必要性が最近の研究で明らかにされている (Hammar, 1997)。本研究でも日系ブラジル人の出稼ぎ現象を、個人の人生のなかで独立したものではなく、ライフ・サイクルのなかに位置づけなくては理解できないという立場にたつ。このことも生活史法を採用した理由である。

調査を行ったフィールドは、岡山県の総社市と倉敷市水島、群馬県の大泉町、宮城県の大賀城市と塩釜市、さらにブラジル帰国者の追跡調査としてブラジルのパラナ州とマットグロッソ州であった。フィールド調査は1995年、さらに1999年から2001年まで実施した。対象とした家族は17家族である。家族員数の平均5人で、子供数の平均は3人である。家族のほとんどが核家族である。17家族のうち9家族が岡山県の総社市と倉敷市、5家族が群馬県の大泉町、3家族が宮城県の大賀城市と塩釜市だった。

第四章 日系ブラジル人家族の生活ストラテジー

第四章では文献調査で日本人移民の生活ストラテジーとブラジル社会での社会的上昇について記述した。さらに調査結果にもとづいて日系ブラジル人の出稼ぎ計画の類型化を行った。初期の日本人移住者は、ブラジルの農村部に移住したが、過酷な労働状況で、移住者の一部は農業に絶望し、都市部へ移動し、新しい職業として商業に従事した。移住者家族は家族成員の労働力によって、徐々に社会的昇を果していった。一方、農村部に残留した移住者は教育を重んじて子弟を都市部で教育を受けさせた。これらの日系ブラジル人の生活ストラテジーは、前山 (1982) が提案したブラジル移民の生活ストラテジー・モデルと一致する。Cardoso (1995) によると、移住者家族の都市部への移動は社会上昇を果すための手段の一つであった。しかし、'70年代後半に入ると、ブラジルの経済状況が深刻になり不景気がつづいた。都市部の労働市場は以前より労働力を吸収する能力が低下し、失業者が増えた (Jannuzzi, 2000)。数年前まで都市部への移動は、日本人移住者にとっては社会移動を果すための有効な手段であった。しかし、農業で貯えた資金を都市部で小売商、露店商などに投資するのが困難になり、高等教育を受けた移住者の子弟は労働力需要の減少で、学校卒業後に仕事に就けない状況にある。ブラジルの不況で商業を生活ストラテジーとしていた日系人は転職せざるを得なくなった。彼らは、新しい事業を起こすための資金を、ブラジル以外に求めるしかなかった。日本出稼ぎは、このような生活ストラテジーを実行するための手段であった。

Jannuzziは、'60年代と異なって現在のブラジルの社会構造では社会上昇を果すのが難しいとしている。その理由は以下の三点である。第一に、労働力需要の減少にともない、労働者の選抜基準が厳しくなったこと。第二に、40年前には移動機会が多く社会移動が実現できた。しかし'80年代に入ると、上昇した家族の次世代がさらに上昇するのが相対的に難しくなったこと。第三に、現在の社会構造内で彼らが上昇するには、誰かが下降する必要があることである。本研究のケースでは、前の世代が築いてきた資産の維持あるいは本人が築いた資産が以前のように運営できなくなっていた。さらに、現在の社会地位の下降も現実のものであった。以上が日系ブラジル人が転職を選択した状況だった。さらに、彼らが来日する前にどのような生活スト

ラテジーを持っていたのかを検討した結果、多数の対象家族が事業の運営に困り、転職を計画していたことが分かった。ブラジルの経済状況が悪化したため、事業を維持するのが困難になっていた。出稼ぎ家族は、新しい事業に投資する資金を、日本出稼ぎで調達することにした。つまり、日本出稼ぎは生活改善策のひとつであり、生活ストラテジーでもあった。

つづいて出稼ぎ計画を検討した。家族の周期段階と、誰が出稼ぎに来たのかに焦点を当てて分析したところ、家族の出稼ぎ計画を7つの異なるグループに分類できた。

1. 子供のいない家族の夫婦出稼ぎ
2. 息子、娘らの自立を機に夫婦出稼ぎ
3. 第一子が低年齢で親の単身出稼ぎ
4. 第一子が低年齢で家族全員の出稼ぎ
5. 就労年齢になった息子、娘を持つ家族の家族出稼ぎ
6. 就労年齢になった息子、娘を持つ家族の親子出稼ぎ
7. 独立した息子、娘の独身出稼ぎ

これらの7グループの分析から以下の三点がわかった。第一に、子供のいない家族、あるいは独立した子供を持つ家族は夫婦で出稼ぎに来る。第二に、就労年齢になる息子、娘は、学校を退学して稼ぎ手として出稼ぎに加わる。第三に、独立する年齢になった息子、娘らは独身者として出稼ぎに来る。

これらのグループのうち、グループ5と7に関しては女性移住者の事例を中心に分析を行った。グループ5については第五章、グループ1、7については第六章で取り上げた。グループ1については、対象家族のなかで、1世帯がこのケースに該当していた。この夫婦家族は結婚する前から出稼ぎを計画していた。結婚後1年目に、彼らは家の改築と、新しい事業を始めるための資金貯蓄を目的にして来日した。来日前は農業を営んでいたが、出稼ぎを繰り返した末に農業をあきらめて新しい事業に向けて資金を貯蓄していった。夫婦は、刺繍工房を開くために資金をブラジルに投資する予定でいる。

第五章 宮城県多賀城市に滞在する出稼ぎブラジル人家族の事例

第五章では、就労年齢になった息子、娘を持つ家族の事例として、宮城県の多賀城市に滞在する一家族を取り上げた。このケースでは、就労年齢になった息子、娘らは本国で学校を退学して、労働力として出稼ぎに加わっていた。資金貯蓄を目的にしていたこの家族は、日本では労働を優先した。まだ就学年齢であった息子は日本で教育を受けることになったが、親は日本での教育に期待をもたなかった。家庭の教育に対する関心の低さが、息子の態度にも反映していた。親の実生活の体験からすると、学歴がなくても家族を支えてきた。高学歴を持つことで安定した暮らしができる保証はないし、高い学歴を目指させるゆとりもない。娘が述べるように、目的を達成するまで出稼ぎを繰り返す予定である。学校は出稼ぎの後のことになる。この家族の息子、娘は、技能・知識を身に付けることなく、日本に来る前に学校を辞めた。日本では単純労働をこなし、事業を起すために資金を貯蓄している。現在の職業経験、知識からは彼らが将来に選択できる職種は限られている。

母親も就労しており、母親、息子、娘は家族の集合財の配分、意思決定に参加していた。この家族の母親は家庭内で占める位置は大きかった。母親は家族から来日するための手続きすべてを任せ、来日中にも仕事に関する問題（長男の解雇問題、長男と上司との摩擦、在留資格

の更新)、次男の教育問題などについての解決方法を任されていた。来日前から母親が占める位置は大きく、異国で団結して生活していたこの家族は母親を頼りにしていた。さらに、この家族関係の中で、母親は家族をまとめる役割を果たしていた。

第六章 岡山県総社市、倉敷市水島の日系人女性移住者

第六章では、岡山県で調査を実施した女性移住者を来日直後に未婚者であったか、既婚者であったかによって、2つのグループに分けた。それによって、対象女性の出稼ぎ体験を分析した。

まず出稼ぎ目的を検討すると、多数の未婚女性移住者は、来日の初期は経済的自立を目指して出稼ぎを選んでいることが分かった。ブラジルでは、ホワイト・カラー職についていた未婚女性でも、経済的に満足できる収入を得られず、また昇進する見通しもない。高学歴を持つ女性は大学で得た技能・知識を生かすことを選択しないで、日本出稼ぎを選んでいった。ブラジルの'90年代の経済事情を考慮に入れると、出稼ぎは安定した収入が得られる手段のひとつであったことが分かる。経済的自立を目指していた未婚女性は出稼ぎを繰り返し資金貯蓄する。

次に対象とした女性たちにとって経済的自立が何を意味するかを調べた。その結果、自立とは親の支援に頼らず一人で生活ができること、家あるいはアパートを購入することであった。しかし、結婚するとこの目的は一変し、貯蓄した資金は家族が事業を起こすために投資される。既婚者の場合は、家族で新しい事業を起こすための出稼ぎであった。これらのケースを検討すると、家族出稼ぎではなくても、女性は結婚すると貯蓄した資金を家族が事業を起こすために投資することが分かった。

職業経験を調べると、ブラジルで就職経験を持たない未婚女性は、学歴があっても日本では単純労働に従事し、知識・技能を発揮する場がない。出稼ぎ生活が長期化するにつれ、本国での就職経験がない彼女等がブラジルに帰国しても、新卒者が労働市場に加入するため、または経験・知識等の遅れで労働市場に加わるのが困難である。ホワイト・カラー職についていた就職経験者女性にも同様なことが言える。帰国しても彼女らは前職に復帰しない。

第七章 総括

女性移住者の全員が来日して初めて電機または自動車部品工業で単純労働に従事していた。それまでは無縁だった単純作業の現場で働くことは、彼女らにとって社会地位が低くなったことを意味する。この単純作業に従事していることを合理化する意味づけ（例えば「一時的なもののだから」「仕事は単純であっても、他の人と違って完璧に作業をこなせる」など）をして、自分の社会的地位を維持しようとする。ブラジルで高学歴を持つ日系人女性は、短期間で多額の資金が貯蓄できることへの期待から、単純労働を行うことに抵抗を感じない。出稼ぎが長期化しても、彼女らは単純作業を行うことに抵抗がない。彼女らは来日目的を達成していくことで、本来の自分は単純労働者ではなく、現在の自分は一時的に単純労働者であるにすぎないと自分の社会的アイデンティティを確認していた。さらに、たとえ出稼ぎが長期化していても、出稼ぎは一時的なものであると意味づけしている。

職場での人間関係を検討すると、工員との摩擦がみられた。それはコミュニケーションの問題、意志疎通の問題、価値観の相違に関する問題であった。出稼ぎの初期には言葉が理解できないことで作業に支障があり、摩擦が起こることがあったが、日本での生活に慣れると、ほとんどの女性はこの問題を乗り越えていた。対象者たちは日本語能力が上達すると、職場の複雑

な人間関係を察知し、距離を保ちながら同年齢の日本人女性同僚と接する。対象者たちは自集団（日系ブラジル人女性）と他集団（日本人工員女性）を比較しながら、両集団の相違点、類似点を意識するようになる。そして、どちらかの集団に属するか、あるいはどちらにも属さないこととなる。前者のケースでは、職場でブラジル人同士で集結してしまう。後者のケースでは、トラブルに巻き込まないように一人で行動する。ケースを検討すると、彼女らがどの集団に属するかは、自分がその集団をどう判断し、評価（肯定的・否定的）するかによって決定されていることが分った。

出稼ぎ体験を通して、未婚女性の場合は、自分が日本人ではない（民族性）、単純労働者ではない（職種、社会地位）との社会的アイデンティティを獲得する。さらに来日前の社会的地位と日本での現状との相異を合理化する意味づけを行う。ブラジル帰国後、経済的に自立できた彼女らに対し、親の期待は結婚である。そのため実家に戻っても居場所がない。また出稼ぎ体験後、彼女らは来日前の生活レベルに戻ることに違和感がある。日本での生活に慣れた彼女らにはブラジルの地域社会への再適応が必要となる。この段階では、経済・生活面で自立した彼女らが、残留家族による来日前の役割期待と、移動過程で変化した意識とのほざまで違和感を体験することになる。他方で、既婚女性の場合、日本で従来の役割を果たし、育児と職業を両立するケースがあった。

今後の課題は、帰国した女性に求められている役割期待と、移動により再編された彼女らの社会的アイデンティティとの関係を検討することである。家族が女性に求める役割と社会的アイデンティティとの一致・不一致は、移動体験に特殊なものなのか、単に女性が家族から独立していく過程で起きるものなのか、詳細に調べる必要がある。

論文審査結果の要旨

本論文は、ブラジルからの出稼ぎ者の家族と女性に焦点をあてて、生活ストラテジーの選択、出稼ぎによる経済的自立、家庭内役割の変化、将来展望などを社会的アイデンティティ理論に依拠して、フィールドワークの知見をもとに論じたものである。

第1章「課題と背景」では、日系ブラジル人社会に日本への稼ぎが生じた経済的背景と本研究での課題が詳述される。1980年代後半からのブラジルの社会・経済状況の悪化にともない失業者が増加し、日系人の日本移動にかぎらず、南米諸国、アメリカ合衆国、ヨーロッパへの移動が活発化した。日本における在留外国人の登録者数の性差は、1994年から現在まで連続して女性が男性を上回り、2000年には外国人総人口の52.6%は女性である。日系ブラジル人女性の半数以上は技能工・生産工程に従事し、以下、サービス産業（ゴルフ場のキャディー、付添い婦、家政婦など）である。そこから論者は4つの課題を設定する。(1)女性移住者の経済的自立、生活自立の問題。(2)経済的自立と女性移住者の役割や社会意識との関連。(3)出稼ぎ家族の生活ストラテジーにおける女性の役割。(4)高い教育水準と技能を持つ日系ブラジル人女性が日本でそれらを必要としない職業に就いた時、このギャップを彼女らがどのように意味づけて対処していくのかの検討である。

第2章「理論的枠組」ではこれら4課題にアプローチする中核理論として社会的アイデンティティ理論に依拠する。社会的アイデンティティを「集団カテゴリーから派生する自己記述

である」であるとする。社会構造を構成しているのは個人に先行する社会的カテゴリー（民族・性・宗教・階級・職業など）であり、各カテゴリーは相互の対比でのみ意味をもつ。個人は、生まれた場所、皮膚の色、家柄などのカテゴリーにより分類され、そのイデオロギーを内面化し、肯定的あるいは否定的な自己知覚を媒介にして特定の社会的アイデンティティを獲得しそれに同一化していく。論者は社会的アイデンティティ・モデルを用いる理由として、女性移住者が日本で敬遠される職種に就くことと、ブラジルで占めていた社会的地位との関連を検討することが可能となるからであるとする。

第3章「研究方法とフィールド」では、主要な方法として生活史法をとり、それは個人のパースペクティブ、すなわち価値観、状況規定、社会過程の知識、体験をとおして獲得したルールなどにアクセスする方法であるとする。日系ブラジル人が語る生活史を聞き取り、それを記述・分析・解釈・編集する作業を通して、国境を超えて異国で生活することの意味、出稼ぎの主体的評価、さらには社会的アイデンティティを理解しようとする。日系ブラジル人の出稼ぎ現象を、個人の人生のなかで独立したものではなく、ライフ・サイクルのなかに位置づけは理解する視点を強調する。調査フィールドは、岡山県の総社市、倉敷市、群馬県の大泉町、宮城県の大賀城市、塩釜市、さらにブラジル帰国者の追跡調査のためブラジルのパラナ州、マツトグロッソ州に広がり、対象家族は17家族であった。

第4章「日系ブラジル人家族の生活ストラテジー」では、まず日本人移民の生活ストラテジーの動向が移住初期から1970年代まで概観される。都市への移動は、日本人移住者にとっては社会上昇を果すための有効な手段であったが、1970年代後半からブラジルの経済状況が深刻化し、商業などの自営業の維持が困難になり、高等教育を受けた移住者の子弟には労働力需要が減少し、生活ストラテジーの転換を迫られ、その一つが日本への出稼ぎであった。家族・個人の出稼ぎ計画は、家族の周期段階によって異なった様相を示し、以下の7つ類型が析出された。①子供のいない家族の夫婦出稼ぎ、②息子、娘らの自立を機に夫婦出稼ぎ、③第一子が低年齢で親の単身出稼ぎ、④第一子が低年齢で家族全員の出稼ぎ、⑤就労年齢になった息子、娘を持つ家族の家族出稼ぎ、⑥就労年齢になった息子、娘を持つ家族の親子出稼ぎ、⑦独立した息子、娘の独身出稼ぎ。さらなる分析で出稼ぎの展開には3段階が区別された。第1に、子供のいない家族、あるいは独立した子供を持つ家族は夫婦で出稼ぎに来る。第2に、就労年齢になる息子、娘は、学校を退学して稼ぎ手として出稼ぎに加わる。第3に、独立する年齢になった息子、娘らは独身者として出稼ぎに来る。要するに、出稼ぎ家族の主たる動機は事業に投資する資金を日本出稼ぎで調達することであり、日本出稼ぎは生活改善策のひとつとしての生活ストラテジーでもあったとする。

第5章「宮城県大賀城市に滞在する出稼ぎブラジル人家族の事例」では、シルバ家と仮称される親子5人についての3年におよぶ詳細な事例研究である。一家の家族史とブラジルのマツトグロッソ州の小都市から資本蓄積のため日本への出稼ぎを決断するまでの経緯、来日前後の家族間の見通しの差異、家族4人が働く職場環境と人間関係、日本語の壁、中学生の次男の日本の学校への適応状態と家族の対応、家族が解決を迫られる諸問題（長男の解雇問題、長男と上司との摩擦、在留資格の更新）への対応、ブラジルへの帰国、再出稼ぎでの来日、職業移動、日本の生活に順応していく子どもたちと両親の齟齬、母親のはたす重要な役割、家族成員それぞれの将来展望などが、日本での面接だけでなく、ブラジルへの追跡調査によって記述されており、説得力をもつ。

第6章「岡山県総社市、倉敷市水島の日系人女性移住者」は、論者が岡山県総社市で1994年に自動車工場の作業現場で共に働いてレポートの形成されている対象者とその家族の追跡調査である。調査対象女性を未婚の来日者と既婚の来日者に大別して、出稼ぎの背景と動機、日本での生活と態度変容を多角的に分析している。出稼ぎの目的を比較検討し、未婚女性の場合にはブラジルではホワイト・カラー職についていても満足できる収入を得られず、昇進の見通しもないため、高学歴女性は大学で取得した技能や知識を活かす生かす選択が不可能で日本出稼ぎを選んでおり、自宅購入、生活資金蓄積などにむけた「経済的自立」の動機づけが高い。既婚者の場合は、家族による新しい事業の起業目的が多かった。

第7章「総括」では、(1)出稼ぎ家族の生活戦略と女性移住者、(2)日系女性の社会的カテゴリー、(3)日系ブラジル人の社会的アイデンティティの再編の3課題について調査の知見を総括している。高学歴の女性移住者が単純作業に従事する心理的抵抗感を、「一時的なものだから」「仕事は単純であっても、他の人と違って完璧に作業をこなせる」などと合理化して意味づけていく。出稼ぎが長期化してもこれを変えないで社会的アイデンティティを確認して自分の社会的地位を維持しようとする。職場での人間関係では、初期にはコミュニケーション、意志疎通、価値観の相違などから摩擦を経験するが、日本語能力が上達すると、職場の複雑な人間関係を察知し、自集団（日系ブラジル人女性）と他集団（日本人工員女性）を比較しながら、両集団の相違点、類似点を意識するようになり、どちらかの集団に属するか、あるいはどちらにも属さない戦略を選択する。未婚女性の場合、出稼ぎ体験を通して、自分が日本人ではない（民族性）、単純労働者ではない（職種、社会地位）との社会的アイデンティティを獲得し、来日前の社会的地位と日本での現状とのギャップを合理化する。ブラジル帰国後、経済・生活面で自立した彼女らが、残留家族による来日前の役割期待と、移動過程で変化した意識とのほざまで違和感を体験することになる。さらに日本での生活に慣れた彼女らはブラジルの地域社会への再適応が求められることになる。

本論文は、日系ブラジル人二世・三世の出稼ぎ者について社会心理学の立場からアプローチしたフィールドワークの集成である。近年、南米諸国からの日系人出稼ぎ者の実態調査が各方面から進められているが、本研究者は女性を主たる対象にして、出稼ぎを、労働者としてよりはむしろライフサイクルにわたる生活者の体験としてとらえなおす視点に立つ。そこから、出稼ぎという生活戦略が選択されるにいたるブラジルの経済変動や日系人社会の動向、日本での労働がもたらす経済的自立、高学歴者が単純労働に就労することの心理的抵抗感の主体的意味づけ、自立後の家族内役割の変化、さらに出稼ぎ体験がブラジル帰国後の生活と態度におよぼす影響を主要な課題にしている。調査地域は岡山・群馬・宮城の3県にわたり、帰国した対象者をブラジルへ出向いて追跡調査している。論者自身が日系ブラジル人三世として自動車部品工場の作業現場に長期間就労した経験とあいまって、課題の設定と分析視角は説得力をもつ。長期間にわたって収集した豊富な資料が日本語表現力の限界もあって十分には分析記述できずにいる面は残すが、これまで見落とさがちであった女性の国際移動に注目して、生活戦略の選択と社会的アイデンティティの再構築過程を対象者に密着して追究した本研究は、今後の移民研究に新たな視点を切り開く業績であると評価できる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。